

戦争の悲惨さ感じて

写真集を出した増田さん



増田さん

7月に写真集「多摩の戦争遺跡」を出版した増田康雄さん(78歳)に、出版の動機、読者へ期待したいことなどを聞かせていただきました。

増田さんが戦争遺跡の撮影をしようと思われたきっかけは？

【増田さん】それは、2010年に都立調布南高校の公開講座を受講して、多摩に戦争遺跡がこんなにも残っているのかと知ったことがきっかけです。それまでは戦争遺跡には全く関心はありませんでした。私は1999年に日本放送協会を退職しましたが、その2年前から現代写真研究所で写真を学び、2010年以降は戦争遺跡を撮影するようになりまし

た。三多摩で43万所と山梨県上野原、慶応大学の横浜日吉キャンパス、明治大学の登戸研究所などを撮影しました。どのようなお気持ちで「多摩の戦争遺跡」を出版されましたか？

【増田さん】それは三つあります。一つ目は戦争体験がない若い世代に戦争の悲惨さを伝えること。二つ目は、多摩地域には戦争遺跡がけっこう残っていますが、零戦のエンジンを作っていた武蔵野市の中島飛行機武蔵製作所の工場が、唯一残っていた建物が2015年7月に壊されてしまいました。戦争遺跡は写真に記録しておかないといけないと思っ

たことです。三つ目は、私も78歳になり、写真集を出せるのもこれが最後になるかと考えたことです。写真集が一つのきっかけになって、戦争の愚かさや悲惨さを感じて欲しいです。撮影するなかで特に印象に残ったことは？

【増田さん】都立東大和南公園の中にある旧日立航空機の変電所のポコポコに開いた銃弾の跡を見た時は強烈な印象を受けました。よくこれだけ強烈な建物を残してくれたなと思いました。ご自身の戦争体験をお聞かせください。

【増田さん】私は1939年2月、東京生まれで終戦の年は6歳でした。戦争の記憶は、青い空に飛行機の編隊が見えたこと、米軍が撒いた伝単を拾ったこと、日本軍の戦闘機が音もなく墜落するのを見たこと、住んでいた中野の防空壕の隣に軍医が住んでいた西洋館があり、その庭に爆弾が落ちたが不発弾であったことなどです。

もしかしら、そういう体験から、戦争はどんな理由があろうともしてはいけないもの、思いが心の底にあって、今回の写真集の出版になったのかもかもしれません。

兵隊の命はシャボン玉

飛行兵学校元職員の池谷さん



兵学校の思い出を語る池谷さん

昨年9月25日、武蔵村山市大南3丁目の兵学校跡地に、「歴史民俗資料館分館」が開館しました。第二次世界大戦

当時、市内にあった東京陸軍少年飛行兵学校などの資料を展示しています。「当時の記録を風化させず皆に伝えるため振り返っていただきました。

【池谷さんの話】東大和の変電所(旧日立航空機立川工場変電所)の空襲の日、同じ部落にいた二つ年下のヒサコさんが「いつ死ぬかわからないから」と言って縫いたのモンペを履いて仕事に行

った。機銃掃射から逃れるため近くの山林に社外退避したが、直撃を受けた。片足だけ木に引っ掛かっていたのを家族が見て、彼女だとモンペで

分かったらしい。あとの胴体とかはどこへ行ったか分からない。それほどひどかった。警戒警報が鳴る時は遅く、鳴るやいなや弾が降ってくる。タコソポ(防空壕)へ飛び込んで逃げたんだけど、その際「北に向けて入れ」と教えられていた。ある日、機銃掃射を受けた時、タコソポへ

頭を北向きに隠れた。戦闘機が通り過ぎた後、みんな首を上げて名前を呼びあい確認するんだけど、同じ年のハナちゃんだけ呼んでも返事がなかった。どういわけか逆向きで隠れていたようで、頭の後ろを打ち抜かれて即死。二度とあっちゃいけないこと。

洋裁学校を卒業した後、昭和18年1月から終戦まで2年8カ月間、兵学校に職員として勤めた。航空機の操縦士や

整備士、通信士になるために来ていた生徒たちは15〜17歳。弟のような年齢の彼らとは、会話を禁じられていた。厳しい訓練があり、里心がつかないための配慮だったんでしょう。

戦争が終わって、兵学校は廃校となり洋裁などで生計を立てていましたが、26歳の時に地元の農家に嫁いだ。ちょうど兵学校があった場所で、元生徒がよく訪ねてきた。当時は会話もできなかったが、地元の郷土料理でもてなしたりするうちに交流が深まった。

その中の一人で12期生の青木さんは、ある日上官に彼を含め6〜7人が所属する班を招集され、習習の特攻隊に班

のなかから一人選ぶように言われたそうです。話し合ったが「空中戦で死ぬなら勉強してきたことで、納得はできるが、特攻隊じゃいやだ」と皆同じ意見。結局くじ引きで、村山さんという方に決まりました。

【池谷さんの話】東大和の変電所(旧日立航空機立川工場変電所)の空襲の日、同じ部落にいた二つ年下のヒサコさんが「いつ死ぬかわからないから」と言って縫いたのモンペを履いて仕事に行

った。機銃掃射から逃れるため近くの山林に社外退避したが、直撃を受けた。片足だけ木に引っ掛かっていたのを家族が見て、彼女だとモンペで

分かったらしい。あとの胴体とかはどこへ行ったか分からない。それほどひどかった。警戒警報が鳴る時は遅く、鳴るやいなや弾が降ってくる。タコソポ(防空壕)へ飛び込んで逃げたんだけど、その際「北に向けて入れ」と教えられていた。ある日、機銃掃射を受けた時、タコソポへ

頭を北向きに隠れた。戦闘機が通り過ぎた後、みんな首を上げて名前を呼びあい確認するんだけど、同じ年のハナちゃんだけ呼んでも返事がなかった。どういわけか逆向きで隠れていたようで、頭の後ろを打ち抜かれて即死。二度とあっちゃいけないこと。

洋裁学校を卒業した後、昭和18年1月から終戦まで2年8カ月間、兵学校に職員として勤めた。航空機の操縦士や

谷中で戦争語りつぐ

会続ける西川さん、植松さん



DVD「谷中で戦争を語りつぐ」を掲げる西川さん(左)と「せんそうかるた」を持つ植松さん

死者10万人、被災者100万人とも言われる1945年3月10日の東京大空襲の数日前である3月4日午前8時40分頃、小雪の降る中、谷中地区はB29爆撃機による

語り継ぐ活動などを続けています。「私も夫も、谷中の出身ではありません。2011年の東日本大震災後、私は原発都民投票の活動をしていました。この年の12月から直接請求の

署名活動を始めたいのですが、署名を持って谷中地域を回っています。和田さんと出会いました。『私も高齢だし、あなたたちにまかせざるわ』と和田さんから資料の保管と毎年の会合開催を託されたので

す」と話すのは「谷中で戦争を語りつぐ会」(以下、「語りつぐ会」)連絡先090-9492-1007

5月4日には、翌年の3月4日には



戦災死亡者70余人の霊を供養するみしま地蔵

ニティセンターで「語りつぐ会」を開き、その後、改築した西川さんの自宅一階を様々な運動の交流の場(谷中の家)として、今年はこの「語りつぐ会」を行いました。参加者には、みしま地蔵(昭和23年当時の三崎町、初音町4丁目、真島町の有志が3町の戦災死亡者70余人の霊を供養

するための建立)におまじりして、「谷中の家」で空襲体験者の片山服恵さんらの話を聞き、語り合いました。また子どもにも関心をもってもらえるように「せんそうかるた」大会も開催しました。「参加するのは0歳から90歳と幅広く、和田さんからまかされた時より3月4日に集

りつぐ会」連絡先090-9492-1007

5月4日には、翌年の3月4日には

ニティセンターで「語りつぐ会」を開き、その後、改築した西川さんの自宅一階を様々な運動の交流の場(谷中の家)として、今年はこの「語りつぐ会」を行いました。参加者には、みしま地蔵(昭和23年当時の三崎町、初音町4丁目、真島町の有志が3町の戦災死亡者70余人の霊を供養

するための建立)におまじりして、「谷中の家」で空襲体験者の片山服恵さんらの話を聞き、語り合いました。また子どもにも関心をもってもらえるように「せんそうかるた」大会も開催しました。「参加するのは0歳から90歳と幅広く、和田さんからまかされた時より3月4日に集

りつぐ会」連絡先090-9492-1007